

愛の扉 (九卷)

帝國キネマ特作映畫

原作脚色監督者

撮影者

字幕製作

兼木お葉

父慶三

岡田宗助

西山健一

中川紫田氏
大森 勝氏
齋藤蛙柳氏

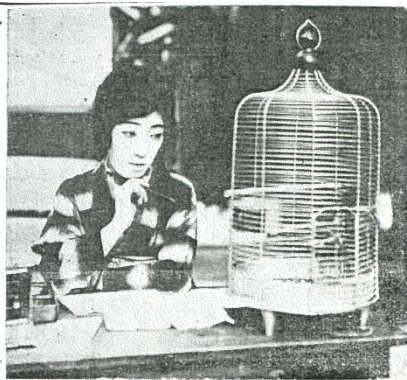
小田照葉嬢

井上海舟氏

五味國男氏

五味國男氏

【略筋】 靜かな奈良の古都に鹿の煎餅賣をして居るお葉は、父の爲に都に出てモデル



「愛の扉」の美しい一場面から。

となつた。都の誘惑は可憐な彼女を汚し罪の結晶をさへ與へた。お葉は或夜誤つて電球を壊し破片の爲に盲目となつた。彼女は處女を捧げた岡田君には捨てられ、家を追はれて、今は死を決心した。お葉を管てから慕つて居た健一は彼女の急を知つてスキーを以て雪崩目かけて進む彼女の後を追つた。折柄彼女は圖らず丁度山へ寫生に來た岡田に逢つた。其處へ來つた健一と岡田との間に格闘が起り、岡田は子供を抱へて死し、お葉は健一に救はれ光明の道へ。今昔新橋の名妓として唄はれた照葉、現小田夫人の主演になつたもので、此映畫に就て家出をしたミヤ、何だとやら、兎に角問題になつた映畫である。

照葉のお葉は、お芝居たつぷりではあるが、素人としてはかなりによく演つて居る。後半盲目になつてからが殊によい。譯りには少しの新味も見出せない。平凡な結核を九巻は餘り長過ぎる。先づ五六巻で結構である。監督法や撮影振りは頗る優秀で中々鮮やかなカットバックや贅澤な染調色や兎事な移動撮影等には感心した。タイトルは非常に感じが好かつた。新しい道に進む事に鈍い帝國キネマ映畫としては頭抜けて立派な物である。

(三月一日 大東京)